青い森鉄道利活用アクション事業

業務完了報告書

【業　務　名】

青い森鉄道利活用アクション事業
「浅虫温泉おもてなし事業」

平成２２年３月

浅虫温泉地域活性化懇談会

【目　次】

１　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２

２　取組の企画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３

３　取組の実施状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

４　取組の検証・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

５　取組を踏まえた展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

６　終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

１　はじめに

⑴　実施団体の日頃の取組

①浅虫温泉地域活性化懇談会は、浅虫地域住民、観光関連事業者、温泉活性化研究グループ、経済団体、地元大学、行政と連携し、平成２２年１２月の東北新幹線新青森駅開業に向けて浅虫温泉地域の活性化を目指すべく事業を実施している。

②当会の目的

ア　衰退傾向にある浅虫温泉の活性化

イ　開業すると浅虫温泉を通らない新幹線対策

ウ　観光地であることの地域住民の意識向上

エ　観光地としての魅力ＵＰの地域資源の見直し

オ　町民からの声による問題点の提起

これらを協議のうえ、協同で取り組むため、景観部会、散策ルート部会、商品開発部会による活動を行っている。

③平成２１年度の活動

ア　宿泊滞在型ツアーの催行。ツアーメニューとして、里山や湯のまち等の散策メニュー、海釣り体験や棟方志功作品鑑賞などの体験メニュー、佐井漁協と青森公立大学との連携による海峡ブランド魚介の提供を行った。

イ　散策コースの案内板を設置した。

ウ　散策や体験メニューについて専門知識を取り入れ、観光客の満足を上げるガイド態勢を整えるとともに、ガイドマニュアルの更新を行った。

⑵　アクション事業を受託した動機

①浅虫温泉は、古くから「東北の熱海」として知られ、青森県でもトップレベルの温泉資産を有し、昭和５０年代は５０万人を超えていたが、湯治客の激減、観光客の旅行形態の多様化などから、宿泊客の減少は著しく、平成１９年には２２万人余まで減少し、廃業閉店する旅館や商店が目立ち初め寂しい温泉景観となっている。

②さらに、平成２２年１２月の東北新幹線全線開業により、浅虫温泉駅は、ＪＲ沿線から青い森鉄道沿線に移行することとなるが、新青森駅から浅虫温泉駅へ鉄道での移動は乗り継ぎが必要となり利用客にとって不便になる。また、すでにＪＲ東日本の観光ＰＲから浅虫温泉の記述がなくなるなど、ＪＲ沿線でなくなることによるマイナス面が出てきている。

③このままでは更なる宿泊客の減少となること自明である。青い森鉄道沿線による魅力のアップとともに、浅虫温泉駅を中心とした浅虫温泉の魅力のアップによる観光客増が必須となっている。

④このため、浅虫温泉の魅力アップの方策を検討し、実施する必要があったことから、アクション事業により行うこととしたものである。

２　取組の企画

(1) 企画の立ち上げ

①浅虫温泉の魅力のアップについては、当懇談会で平成１９年度より検討してきている。その中で、観光客に浅虫温泉の人たちのおもてなしの心を伝えるためにどのようにしたらよいかということが話題になっていた。

ア　浅虫温泉に駅から降り立ち歩く観光客に対して、浅虫温泉駅を中心とした駅前通りを楽しく歩けるようにするためにはどうしたらよいか。

イ　観光客が夜に浅虫温泉を楽しく歩くために、照明による演出をどのようにしたらよいか。

ウ　観光客に浅虫のグルメを堪能してもらいたい。また、Ｂ級グルメが注目されていることから、浅虫らしいＢ級グルメを食べて貰うためにはどうしたらよいか。

②今回、事業を検討するにあたり、何をするかということについては、１月１８日（月）と２月９日（火）に当懇談会を開催し、内容について検討したところ、上の課題についてやってみたらどうかということで了解を得たところから、これらについて行うこととし、各内容について、グループをつくり検討実施していくこととした。

(2) おもてなし表現のモデル事業への取組み

①駅前通りを楽しく歩くためには､通りにおもてなしの心を表現する必要があり、平成２０年に、県と共催で東京大学大学院の堀繁教授による浅虫景観まちづくり研修会を開催した。その中で「魅力的な温泉地のまち」とするためには「魅力的な通り」と「魅力的な店」にしなければならないとしていた。

「魅力的な通り」にするためには、「歩いてみたい魅力的な道」「見てみたい魅力的な沿道施設」「休んでみたい魅力的な滞留拠点」とする必要があること、「魅力的な店」とするためには、「入ってみたい魅力的な店前」「雰囲気のよい魅力的な店内」「買ってみたい魅力的な商品」とする必要があることを教えられた。特に、店舗店前の整備・演出は、「店を魅力的にする」点からも、「街を魅力的にする」点からも、たいへん重要であること、また開業に向け１年を切った状態の中で、即効性のある事業であること、駅や店舗店前のおもてなしの表現を中心に堀教授を講師に招き指導を受け､モデル事業を行うこととした。

②おもてなしの表現を観光客に伝えるということは、浅虫温泉全体に係ることから、おもてなしの表現をしたまちづくりを目指すため、講師として招く堀教授を今後ともアドバイザーとして引き続き指導していただくため、２月１２日には青森市長に対して、堀教授を市のアドバイザーとして委嘱していただくよう要望した。また、堀教授にも、３月８日におもてなし表現を指導していただくとともに、今後とも懇談会の顧問として指導していただくよう、２月１７日に十和田市休屋に来ていた堀教授に懇談会の幹部が直接お願いした。

③モデル事業については、３月９日に堀教授により指導を受け、３月２２日に実際に駅前通りの店前を指導を踏まえた飾りを実施することとした。事業の実施

に当たっては、浅虫の青年で組織されている浅虫青年経済研究会（以下「青経会」という。）のメンバーの店舗が中心となることとし、青経会の会合で了解を得、ゆ～さ浅虫などの協力も取り付けたところである。

(3) ライトアッププロジェクトへの取組み

①照明による演出については、従前より浅虫温泉駅前の通りについては、夜暗いという認識があり、特に駅前は駐車場や空き地が広がっており、一段と暗い印象があった。観光地に対する印象については、第一印象で決まるといっても過言ではなく、いまのままでは、暗くなってから駅を降り立った人達が浅虫温泉に抱く印象は、暗い・寂しいという印象になっており、浅虫温泉宿泊客の減少の一因になっていると考えている。現在、浅虫温泉駅前通りの無電柱化の工事が県により行われているが、懇談会で集まった都度、この暗さを何とかしなければという意見でまとまっていた。

②今般、照明の専門家が青森に来るという話があったことから、浅虫温泉を訪れる駅周辺や海岸エリアでライトアップでお迎えすることで、おもてなしの心を表現し、暗い・寂しさを解消するものである。なお、ライトアップに当たっては、照明の専門家が青森に来ることから、助言指導も受けることとしたものである。

③照明については、南部屋さんの中村専務を中心として、青森商工会議所や浅虫青年経営者会（青経会）の会員とともに検討を行い、青森市で金魚ねぶたがあるということから、この金魚ねぶたを使い、駅やその周辺に飾ることとした。また、照明の専門家からは、湯の島のライトアップもどうかという提案があったことから、どのようにしたらよいか指導を受けながら実施することとしたものである。

④湯ノ島のライトアップについては、湯ノ島の周辺は水深が浅いため底の浅い船だけしか桟橋に着けないので、出力の大きな発電機は重く運ぶことが出来ないため、どのような発電機を使ったらいいか議論があった。
また、ライトアップの仕方として、投光器によったらいいか、提灯にしたらいいか、その他のものがあるか、いろいろな意見があったが、発電機の出力が限られていることなどから、大きな提灯により試してみることとした。また、ＬＥＤや金魚ねぶたなども対岸からの視認性を試験することとした。

(4) 浅虫温泉駅沿線オリジナルご当地グルメの取組み

①浅虫温泉の食については、旅館が多いということで、過去「平目づくし」や、当懇談会でも佐井漁協や青森公立大学と共同で海峡ブランド魚介の提供などいろいろなことに挑戦してきている。また、浅虫にある鶴亀食堂のマグロ丼は全国的に有名となり、全国各地から観光客が来ている。個別の旅館でも、何とか名物料理がないか考えていた。

②青経会会合のおりに、青経会のメンバーである旅館経営者が、貝焼き味噌はご飯にのせて食べるとおいしいということをメンバー同士で話していたことか

ら、試作品として「貝焼き味噌」をご飯にのせた丼を試食させたころ、青経会のメンバーに好評であったことから、ご当地グルメとして売り出すことはできないかという意見となった。

③３月９日に最終的な打合せをし、アドバイザーとして県観光企画課の職員も同席して検討した。検討では、貝焼き味噌丼に加え、平目を使った丼ができないかという意見などがあった。これらを踏まえ、平目を使った丼と貝焼き味噌丼の試作品を提供し、アンケートをとり、今後の開発の参考にすることとした。

④平目を使った丼については、南部屋の板前さんが中心になり、どのようなものがいいか研究していただいたところ、平目の漬けという意見もあったが、厚く切らないといけないが、平目の単価が高いことから、相当高い料金の設定となるため、平目をたたいたものを使った丼とすることとした。

３　取組の実施状況

(1) おもてなし表現のモデル事業

①堀繁教授による指導

・開催年月日　平成２２年３月８日（月）

・研　修　会　１５：００～１７：３０　浅虫町内を中心に約４０名

・意見交換会　１７：３０～１８：３０　懇談会メンバー等約１８名

②講演会

浅虫に「おもてなしの心」をどのように表現するか研修を行った。

１　浅虫温泉の現況

1)駅前通り、商店街

駅前通りと商店街は来訪者が少なく、活気をなくしている。特に来訪者の印象を左右する駅前通りの活気のなさが温泉地としては大きな問題である。

2)駅前通りと温泉地との関係

駅前通りの魅力のなさが温泉地全体の活気を奪っている。

3)温泉街の不振の原因

「歩いて楽しい」という街の魅力が弱い。それが不振の原因である。

「行ってみたい」と誰もが思わなければ、不振に陥るのは当然。

4)店舗と街の関係

店舗は街の魅力と集客に大きくかかわるが、その店舗の魅力が弱い。店はものを売ればよいというものではない。道を通る来訪者から目につくので、「通りを歩いて見るだけでも楽しい」ことが店の大事な要件である。

「店を街の魅力とする」ための店の整備が重要。

２　店を魅力的にするための考え方

沿道施設は主に旅館と店舗であるが、店舗は「ここで買いたい、食べたい」と思わせ、記念写真が撮られるくらいでなければいけない。

入ってみたくなる店、入ったら雰囲気が良い店、買いたくなる商品のある店が、「魅力的な店」である。しかし、店内が魅力的でも、店前が魅力的でなければ、人は店に入ろうとしない。店舗店前の整備・演出は、「店を魅力的にする」点からも、「街を魅力的にする」点からも、たいへん重要である。

３　魅力のある店とするための三種の神器

見て楽しい店とするためには、店内と店の前を魅力のあるものとする必要がある。人の視点は上は２０度下は４０度の６０度しか見ていない。よって、人は１だけしか見ていないので、魅力のある店づくりでは、１階部分が重要である。そして、店の見えるところをきめ細かく丁寧にしてるように見えるようにして、金をかけずにホスピタリィ表現を示している。

魅力のある店づくりとするためには、ホスピタリティ表現を示した「三種の神器」を店に設えることが大事である。お店は、ホスピタリティ表現をお客に対してたくさん話しかける必要がある。

三種の神器

a　挨拶の装置（「こんにちは」と話しかける装置）

・・・植物、花鉢

b　迎客の装置（「いらっしゃいませ」と話しかける装置）

・・・のれん、ベンチ、いす、照明、木のドア、開け放たれたドア

※木は人をもてなすことができる最高の材料。ガラスにポスターを貼るのは、お客をもてなさないと宣言しているようなもの。

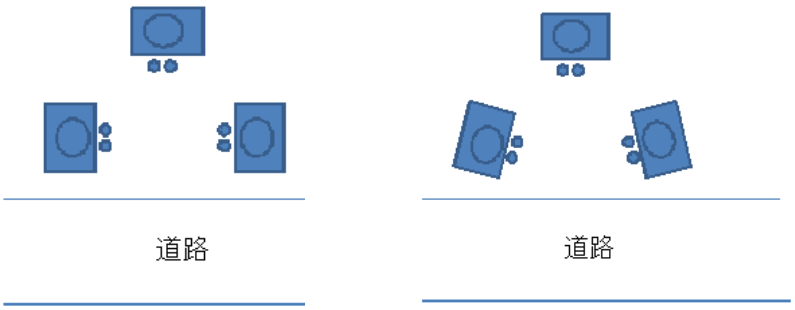
ベンチはどうせ座らないと思っても、ベンチがないと殺風景になる。

c　集客の装置（「買って行って、食べて行って」と話しかける装置）

・・・手書きのメニュー、商品サンプル、商品、看板

4　椅子の置き方

堀教授より「４つの椅子をどう置いたらいいか」という宿題をだされた。ただ椅子を並べるだけではだめだということで、ベンチは、歩いてきたゆっくり休めるようにするという役割がまずある。そのためには、腰を下ろす道具としてのベンチと、ここが見落とされている点だが、ベンチには「なわばり」である自分のスペースが必要である。なわばりは、他の歩行者も自転車も通らず、身の危険がないようにすることで、安心して、居心地よく休むことができる。ベンチに座って、周りの景色を見て、ゆったりし、人と話をするなど楽しくすることが必要である。観光地では楽しくしている人を見せることが魅力的かどうかのカギとなる。人は楽しい人を見ると楽しく感じる。（注；神経経済学でも、人は満足すると脳の中のニューロンでドーパミンがでる。ドーパミンが多いと満足の度合いも深い。人は、人が笑っている姿を見るとドーパーミンが多くでて、自分も楽しくなり満足度が大きくなることが立証されている。）観光地では、ベンチとかに座って楽しんでいる姿を観光客に見せると魅力的なまちだと思われ、観光地として成功する。ベンチの配置も、人が楽しめるようにすること、そして楽しんでいる姿を歩いている観光客に見せるにはどうしたらよいかという観点で置く必要がある。このためには、次のような配置をすることで、椅子に座っている人は、仲間と談笑でき笑うことができる。歩いている人も座って笑っている人の姿を見ることができる。



③ご当地グルメの開発及びモニタリング調査

地域の食材や地元に根付いている調理方法などを活かした浅虫ならではのメニューを開発するため、「ホタテ貝焼き味噌丼」と「平目しぐれ丼」を無料（20食）で提供するとともに、今後のメニュー開発の参考とするため、モニタリング調査を実施した。

・「ホタテ貝焼き味噌丼」

ホタテの貝焼き味噌は、ホタテを味噌とダシで煮込み、ネギなどを入れて卵でとじる昔から地元の家庭料理として親しまれる郷土料理のひとつである。地元では、旅館や食堂などでも提供され、観光客にも人気のメニューの一つであるが、今回、ホタテの貝焼き味噌をごはんにのせ、丼にして提供した。

・「平目しぐれ丼」

県魚である平目は、高級魚のイメージがあり、一般的にはお刺身で食べられることが多いが、より気軽に食べていただけるように、平目を細かく叩き、醤油、味噌、薬味などを混ぜたものと長いも、きゅうりの角切りを一緒にごはんの上にのせ、丼にして提供した。

・提供場所・時間

①ホタテ貝焼き味噌丼　　道の駅ゆーさ浅虫レストラン 10:30～11:30

②平目みぞれ丼　　南部屋旅館魚心亭 11:00～12:00

・提供数　　各２０食

「ホタテ貝焼き味噌丼」

道の駅ゆーさ浅虫レストラン入口の様子

道の駅ゆーさ浅虫レストラン内での試食の様子

「平目みぞれ丼」

南部屋魚心亭前の様子

南部屋魚心亭での試食の様子

④駅前ライトアップ

駅前の足湯に金魚ねぶたを飾りつけ、夜はライトアップした。普段は殺風景な駅前も、金魚ねぶたを飾りつけたことで、華やかな印象を与え、観光客が写真撮影するなど、さっそく効果が現れている。

⑤駅構内などに金魚ねぶたを飾りつけ、駅を利用される方におもてなしの心を表現するとともに暗い印象を解消できたものと思われる。また、駅周辺以外にも地域住民が積極的に金魚ねぶたを飾りつけるなど、地域全体のおもてなしに対する意識の醸成が図られた。

駅構内、店舗上の装飾

駅構内出入口の装飾

町会事務所の装飾

⑥モニタリング調査結果

おもてなし事業に関するアンケート調査を実施した。

・日　時　平成２２年３月２２日　10:30～20:00

・場　所　①ゆーさ浅虫　②南部屋旅館

・回答数　３０件

金魚ねぶたを活用した装飾やライトアップ、ご当地グルメのおもてなしについて「悪い」という回答は１件もなかったことから、今回の企画について、一定の評価が得られたと捉えている。また、このようなイベントの必要性については、「必要」と回答している方がほとんどで、その他の回答も、企画内容や実施方法についての意見であり、回答者全員がその必要性を感じており、地域に対する期待が高いと実感した。

□性別

男性	女性	未回答
15 名	8 名	7 名

□年齢

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
2 名	2 名	6 名	7 名	5 名	4 名	4 名

□居住地

浅虫地区	青森市内(浅虫地区以外)	その他
4 名	14 名	12 名

□各企画への評価①

	良い	普通	悪い	その他
駅構内の金魚ねぶたの装飾	12 名	12 名	0 名	1 名
駅前足湯の金魚ねぶたによるライトアップ	14 名	2 名	0 名	4 名
駅前通りのベンチ等の設置	8 名	6 名	3 名	3 名
湯の島ライトアップ	中止			

□各企画への評価②

	良い	普通	悪い	その他
ホタテ貝焼き味噌丼	9 名	4 名	0 名	3 名
平目みぞれ丼	8 名	3 名	0 名	1 名

□今後のイベント企画について

必要	不要	その他
25 名	0 名	3 名

４　取組の検証

(1) おもてなしの表現のモデル事業

①どうすれば魅力的になるのか

堀教授の研修会では、観光客が満足し魅力的だと感じるためには、どこか一点１００点の場所を作る必要があると言われた。そのためには、駅を中心として道、沿道の旅館・店、滞留拠点の３つを魅力的にする必要があることを痛感した。そのためには、どうしたら魅力的にできるかということが問題となった。研修会では、堀教授から県や市のお金で研修しても身に付かない。自分のお金を使って、研修してこそ身に付くということを言われた。そして、ヨーロッパや国内の魅力的な場所に行き、実際に体験して、魅力的にするためにどうするか考えることで身につけることができるとしている。実際、今回椅子や花を置くだけで、観光客が魅力的と感じるか懐疑的な意見があった。しかし、やってみて効果がなければ続ける人はいないと思う。やるからには、実際してみて観光客が増えるようにしないとだめだが、自信がない状態であり、このまま続けても失敗するだけではないかという意見もあった。また、まちづくりを真剣に考え議論し、実行していく組織が必要だという意見もあった。

②まとまらない浅虫温泉地域

また、研修会の中では、町民から、地域で何かをしようとしても、旅館組合に言っても、コンベンション協会に言ってもまとまらず、どこに言ったらいいのかという意見があった。実際、過去の浅虫で、駅前通を一方通行にしようとか、まちづくりをしようとしても、意見の対立があり地域でまとまることがなく、いろいろな計画が潰れていった。地域をひとつにまとめる必要があるが、既存の旅館組合、コンベンション協会や温泉組合などは、それぞれ利害が違うこと、会員が限定的なことからまとまらない。まちを魅力的にするということも、どこが中心になってするかというと、今は懇談会があるが、懇談会も町民を一つにまとめて活動するという組織でもなく、地域を一つにまとめる組織が必要であるという意見が多かった。

(2) ライトアップ・プロジェクト事業

①駅前の金魚ねぶたによるライトアップは、駅に降り立つ観光客を出迎える手段として好評だった。駅での展示ということで、了解をもらえるのはどこかということで、手続き的に時間がかかったが、無事に無料で展示でき、しかも今後もこのまま展示してほしいという要請が駅からあった。

浅虫温泉駅が観光地の入り口の駅としてふさわしい展示をするということで、今回の企画は成功だったという意見がほとんどを占めていた。また、駅前どおりだけでなく、跨線橋部分や、サンセットビーチなどのライトアップもしたらどうかという意見もあった。

②湯ノ島のライトアップについては、今回風が強く実施できなかった。どのようにライトアップするか、電源をどうするかなど問題点が山積みだった。湯ノ島

を資源としてどのように位置づけ、見せていくかという総合的な観点からの検討も必要だろうということとなった。

(3) 浅虫温泉駅沿線ご当地グルメ

①今回実施した「貝焼きみそ丼」は、ほとんどが定食として提供されてきたが、今後、どんぶりでの提供やその味付け、具材なども各旅館等で試行錯誤しながら検討していきたいという意見であった。

②「平目のみぞれ丼」については、単価や採算の問題もあり、提供できる旅館は限られており、地元のグルメとして広げていくのは多々問題があるという意見であった。また、平目自体が浅虫と関係ないということで、物語を作りにくく、愛着のあるグルメになりづらいという意見もあった。

③また、今回の検討の際に、地元の食卓でだされている「ホタテの稚貝のかす汁」は実施できなかったが、ある家で田酒の酒糟を使ったほたての稚貝のかす汁を作ったらすごくおいしかったという報告があった。田酒の酒糟は高いので商業的にペイできるか問題があるが、ホタテの稚貝は近くの漁協から１箱でも２箱でもという意見もあり、Ｂ級グルメというか地元で提供できるものは、地元で採れるもので、他の地域では捨てているもの使っていないもので、安くうまくできるもの、というのが条件だろうという意見でまとまり、それに合致するのは「ホタテの稚貝のかす汁」だった。

④さらに、浅虫温泉にはくじら餅屋が３軒あり、浅虫の名物となっている。このため、くじら餅屋さんを中心に新たなスイーツも作ってみたらどうかという意見もあった。

５　取組の検証を踏まえた展開

(1) おもてなし表現のモデル事業

①今後も堀教授をアドバイザーとしてお願いし、まちを魅力的にすることを考えていく。現在実施されている駅前通の電線地中化とも連携して魅力的な浅虫温泉をつくっていきたい。そのためには、青森市の協力もかかせず、より地域に密着した組織が必要となる。今後、懇談会を発展的に解消し、市も入れた協議会の設立を目指していく。今後は、協議会を中心にして、いろいろな意見を取り入れ、そして堀教授の意見を参考にしながらおもてなしの心を表現したまちづくりを進めていきたい。

②また、駅を中心とした地域をまとめ、地域の人が中心となって実際に行動する組織として青経会があるが､住民人口の減少及び高齢化などによる会員の減少、また女性の力が不可欠な今の時代に入会資格が男だけという時代遅れの状況にあったことから、駅を中心としたまちづくりのパートナーを広く受け入れるため、まちづくりの意志と共通認識が同じ青経会のメンバーを中心に、より駅中心のまちづくりに特化した組織としてＮＰＯ法人を設立することとし、今回の研修や事業を踏まえた駅中心のまちづくりなどをしていきたい。

(2) ライトアップ・プロジェクト事業

①まちの魅力をアップするものとして、照明は欠かせないものであり、まちづくりの一つのテクニック手法でもある。

②駅については、金魚ねぶたをそのまま残し、観光客を迎えることとした。
駅前通りのライトアップについては、いろいろな考え方もあり、今後設立される協議会やＮＰＯ法人等で議論をしていき検討していきたい。

③湯ノ島のライトアップについても、湯ノ島の位置づけやどのように見せていくかという総合的な議論の中で検討していきたい。

(3) 浅虫温泉駅沿線ご当地グルメ

①今後は今回実施できなかった「ホタテの稚貝のかす汁」を研究を重ねていき、新幹線開業イベントなどで振る舞えるようにしていき、浅虫温泉駅の名物としたい。「貝焼きみそ丼」も各旅館で研究していき、より観光客に受け入れられるものとしていきたい。

②また、浅虫温泉には、名物のくじら餅の店が多く、ゆ～さ浅虫の売上ＮＯ１となっており、くじら餅の他にも名物となる新たなスイーツも作っていきたい。

６　終わりに

①危機意識

浅虫温泉は、宿泊客の減少が続き、旅館の廃業も毎年でている状況となっている。しかも、ＪＲ沿線でなくなることから、新青森駅から何回か乗り換えしないと来れなくなり、観光客にとっては交通の不便な地域となる。また、昨年末からのＪＲ東日本のパンフレットから浅虫温泉の記述がなくなり、ＰＲ力の面でも落ちてくることから、このまま何もしないと更なる地盤沈下となり、観光地の浅虫温泉自体の存続さえ脅かされるという意識が地元にはある。

②浅虫温泉地域と青い森鉄道の魅力アップ

その中で今後浅虫温泉が生き残るためには、一つには浅虫温泉地域の魅力を高め、銀山温泉のように不便な地でもお客さんが喜んで訪れるような観光地としなければならない。また、青い森鉄道沿線となることから、青い森鉄道自体の魅力を高め、沿線各駅の魅力を高めて青い森鉄道に喜んで乗りたいという鉄道にしなければならない。

③今回の事業の意義

危機意識があり、魅力アップをしなければならないという意識はあり、県等で研修会や勉強会が多々開催され、魅力アップの理論は知識として持つことができるが、実際にイベントやまちづくりの中で実践していかなければ地域の魅力がアップできないし、問題点も現れてこない。今のままではだめだという意識は、旅館経営者と観光客といった実態に対峙している人にはあるが、総論賛成各論反対の世界で、実際に実践していくと多々問題がでてきている。さらに、観光客と関係ないまちの人たちは、観光客を迎えるまちにすること自体に賛成していない人もあり、実際に事業をしていく過程で試行錯誤しながら行っている状況となっている。また、おもてなしの心を表現すること自体難しく、実践していくなかで自分の血や肉として染みこませていくしかないものである。

このような中で、モデル事業を実施できる事業というのは、理論を実践できる数少ない事業として大変有効な事業であったと思っています。事業をすることで、新幹線開業が身近に思え、理論でなく実践的な問題点が現れ、今後の展開も地に足の着いた実行できるものができるものと考えています。

④今後の展開

今回の事業の実施にあたって、組織的な問題も露呈しており、まず、この組織を実効性ある組織に改編していく必要があると痛感しております。幸いにも、協議会やＮＰＯ法人を新たに立ち上げる方向でいっているので、今後はしっかりした基盤を持つ組織での事業の実践ができるものと考えております。

また、このような事業ができれば幸いと思います。さらに、青い森鉄道沿線の魅力アップのために、沿線各駅の団体が集まり意見交換会などを実施できればいいなと思っております。

今後も、青い森鉄道沿線として浅虫温泉駅の魅力を高めていかなければ、浅虫温泉自体の存続がなくなるという危機意識を持ちながら、観光地づくりを進めていきたいと思っています。